

# 【届けられなかった音義】



よう、久しぶりじゃないか。

もうあたしのことなんて、覚えちゃいないか……。

なんだよ、お前が言ったんだろ？ 少しは雅やかに出来ないかって。それで出て来てみれば、そんな顔するんだもんなあ。

ハハ。まあ、あたしの声ももう……届かないだろうさ。

おいおい、人をそんな死人が蘇った！ みたいな顔はもうよしてくれよ。

そうさな……ちょいとおさらいから始めよう。あたしはミンフィリアに呼ばれてシャーレアン本国から暁の力になる為に駆け付けたんだ。

短い間だったが、暁の一員としてみんなと活動できたことを誇りに思ってるよ。研究の成果も示すことが出来たし、遠い未来かもしれないがアシエンの野郎をどうにか出来る指針くらいにはなれたと思ってる。

白聖石やエーテル・エクストラプターはあたしの形見だと思って、飾っておいておくれよ。いや、遺品なんてガラじゃない。ヤ・シュトラでもパパリモでもガンガン改良してくれて構わないぜ。あたしは、もう一步足りなかったからさ……。

そうさ、あたしはもう消滅してる。そんな顔をされてもおかしくない人間さ。

え？ どうして今更出て来れたのかって？ そうか、そっち側の人間からすれば不思議なんだな。

あたしはあの瞬間確かに、僅かに足りないエーテルを補うために、自らをエーテルとして注ぎ込んだ。そして結果的にナブリアレスを消滅させることが出来た。あたしは悟ったよ、これで良かったんだって。あたしの使命を果たすことが出来たんだって。

だがあの時、ルイゾワ様の声を聞いた気がしたんだ。かつてあたしに何も言わずに去ったルイゾワ様が、裏切られたとすら思ったルイゾワ様の声が……。

そしてほんの少しだけ、あたしのエーテルが名杖トゥプシマティに吸収された――。



時間にして数秒もなかったが、あたしの身体は消滅し声すらも発することは出来なかった。

それでも、あの時から、あたしはずっと……みんなを見ていたよ。

ようやく、一つの歴史が動いたね。

ウルダハでの戦勝祝賀会でナナモ陛下が毒殺された時は度肝を抜いたもんさ。混乱が混沌を呼んで、あれよあれよという間に北へ行くことを余儀なくされた。

一番へこんでたのはアルフィノだったな。イイ男と、あんたが見捨てないでくれて安心したよ。ありがとう。

イシュガルドでの闘いは、多くの者たちが死んだ。多くの者たちが涙を流した。多くの者が怒り、多くの者が裏切られ、たくさん……たくさん傷跡が残っちまった。

アイメリクが背負ったものは大き過ぎる代償だ。ルキアがいるとはいえ、協力してくれる四大名家や、雲霧街を束ねるヒルダたちの支えもなければ復興は難しいだろう。何より、街全体の気風が変わって、若い世代が育たないことには真の変革は完成しない。

イゼルが託したドラゴン族との融和も、時間が癒してくれる部分があるかもしれないが、アイメリクにとって父トールダンを討った今、ここからが正念場だろうな。エオルゼア都市軍事同盟としても、これまで鎖国的だったイシュガルドを迎え、より盤石な同盟として体制を整えていかなければいけない時期に入る。あの合同演習が先駆けになっただろうが、ナナモ陛下がご健在だったのが大きいだろう。あのお方は今や、エオルゼアの象徴的な存在になったとあたしは思ってる。コトを動かすのが将だとしても、大衆を動かすことが出来るのは華やかな希望だ。あのお方の願いはいずれ、エオルゼア全土に影響を与えるはずさ。

同じように暁の希望が潰えない限り、あんたたちもこれまで同様どんな形であれ協力体制を取るんだろう？ 覚悟して臨まないとな。

時に、オルシュファン。野郎とは、一度会ってみたかったな。ああいう熱い野郎は好きだぜ。あたしもイイ人生の締めくくりが出来たと思ってる。ひょっとしたら、あっち側で会うこともあるかもしれないな。

……ああ、あたしらの死に様をとやかく言ってる連中がいるのは知ってる。けど言わせておけばいい。他人の人生を語れる人間なんて、どこにもいやしない。

あたしが納得して、選んで、掴んだ人生だ。あたしが生きてきた意味が、ようやくあの時分かったんだ。だからあの場面にあたしがいて、あたしにしか出来なかった選択だった。

あたしが見つけた答えに、ひとカケラも後悔なんてないぜ。ざまあみろ、誰が何と言おうと我が生涯に一片の悔いなしってやつだ。こうして、最後の時間も貰えたわけだしね。

そういや、暁のみんなと再会出来たみたいじゃないか。ヤ・シュトラの目、気づいてるんだろ？ エーテルの後遺症は治らない。あんたがあいつの目になってくれると助かるんだけどな。ま、あいつがそんなこと望まないか。素直じゃねえからな、奥手そうに見えて案外強気だし。ガンゴで融通が利かなくなったら、妹の所にいけばいい。なんだかんだ、ヤ・ミトラには頭が上がらないらしいからな。間違ってもマトーヤ様に頼るんじゃないぞ。これ以上はカエルにされちまうからな。

アルフィノは妹と仲良くやんな。アリゼーだってもう、一人前さ。なんだいあの戦闘スタイル、古書にも載ってないよ。まあ、あたしは斧をブン回してる方が好きだけどねえ。一度別れて、それぞれが成長して再会した。これ以上望むべくもない展開じゃないか。むずがゆいねえ。もう離れるんじゃないよ。ルヴェユール家の名は、あんたたちが背負っていくんだ。たとえ道を違えたって、あんたたちにしか成せない使命がきつとあるんだから。それをルイゾワ様も見てくれているはずさ。

それからパパリモか……あれは何を考えてるんだろうねえ。今トゥプシマティはパパリモが持ってる。あたしのエーテルはもう僅かだから、あれが何をしようとしてるかまでは見てられないかもしれない。

もし……もしもだ、あれが短気を起こそうとするなら全力で止めてやってほしい。パパリモは普段から理知的で傍観しているが、計算高そうに見えて時々突拍子もないことをする。え…？ それはイダの役回りだって？ いやいや逆だよ。イダの無鉄砲さがパパリモの引き金を鈍らせているのさ。パパリモにとっては親心に近い感覚なんじゃないか。あの二人はペアを組むようになってから長い。まあ、お互いにバランスが取れているのさ。

サンクレッドといえは、いい男になったじゃないか。ただの色男だったアイツがねえ。イッチョ前に隠れて修行なんか積んできて、大分顔つきが変わったもんさ。

だから、ミンフィリアの一件は、大きかっただろうな。昔のアイツなら、俺も一緒に！ なんて言ってたかもしれない。けど拳を握って飲み込んだ。あんなに震えながら……。ミンフィリアが自身を非力だと思っているように、サンクレッドも自身を無力だと嘆いていた。だから二人はお互いを認めている。

ミンフィリアは、きっと大きなことをやってくれるだろうさ。そして、もう一度アイツの前に帰ってくるはず。それがいつになるかはあたしにも分からない。

ただ、一つだけ言えることがあるとすれば……その時まで、あんたは立ち止まっちゃいけないってことさ。

次はアラミゴに行くんだろ？

知ってるよ、見ていたからな。あの子…イダのことをよろしく頼むよ。どうしてあの子が顔を隠すようになったのか、あたしは知ってる。かつてあたしもイダの力になってやりたいと思って気に掛けていた時期があった。それからの長い付き合いさ。

それでもイダは、マスクを取らなかった。……取れなかったんだ。それくらいイダのマスクは、あの子の人生にとって重い枷になっちゃった。

あの子の心を解きほぐすことが出来るのはあたしでも、パパリモでもない。あんたかもしれないって思ってるよ。

アラミゴに行くなら避けては通れないぜ。領地奪還も大事だが、あの子の仲間として、あんたの仲間として、ちゃんと考えてやってくれよな。

あたしが退場してしばらくして、ナナモ陛下が毒殺されたとあってイシュガルドに旅立って……あれから本当に、本当に長いコト余生を楽しませてもらったよ。

おっと、どうやらそろそろ感慨に耽るのもお終いのようだ。……時間だ、あたしのエーテルも底を尽きちゃった。トゥプシマテイにも空っぽさ。まあ、これだけの時間を貰えたんだ、ルイゾワ様に感謝してもし切れないよ。

……ウリエンジェ。お前は自分の行いを嘆くかもしれない。けどあたしは、お前の判断は間違っちゃいなかったと思うぜ。なに、簡単なことさ。お前の考察が間違ってたことなんて、これまで一度だってあったかよ。いいや、無いね。あたしの知る限り、お前は常に最善で、最大の結果を招く判断をしてきた。なぜならお前は、あのルイゾワ様の一番弟子だろ。

そろそろお前は、自分を過小評価するのをやめるんだ。お前の確信は、みんなの信頼を左右する。お前はブレるな。あたしが保障する、ルイゾワ様の二番弟子のこのあたしがさ。

ウリエンジェ、闇の戦士たちを救いたいと思ったお前の気持ちを、あたしは蔑ろにしない。そしてそれを救うことが出来るのは他にもない、ミンフィリアにしか出来ないことなんだ。マザークリスタルに触れ、ハイデリンに選ばれたミンフィリアにしか。これは結果論じゃなく、コトが起きなくてもいずれミンフィリアはそれを願ったはずさ。

そもそもミンフィリアが、暁のリーダーなんて器に収まるタマじゃないだろ。

エオルゼアを愛し、星を愛し、いずれ世界だって守ってみせるさ。それが、ミンフィリアの使命なんじゃないかってあたしは思ってる。

なあウリエンジェ。人は生まれながらにして何かの使命を背負っているってよく言うだろ。あたしはあながち間違いじゃないと思うんだ。それに気づくのが遅いか早いかの違いでさ。あたしはあの最後の瞬間に気づけた。ひょっとしたら、気づけずに終わる人もいるのかもしれない。だが、ミンフィリアの使命が調停者側にあったように、きっとお前にも使命があるんじゃないか。その時まで、絶対にくたばるんじゃないよ。

自身の使命を見つけることが人生なんだとしたら、その旅は……あたしの、ムーンブリダの旅はここで終わりさ。大分長いコト、余計に夢見させてもらっちゃったけどな。

じゃ、あたしは一足先に行くぜ。またな。

「っ……ムーンブリダ。ああ、ムーンブリダ……」

薄暗い室内でわずかな明かりしか点けずに、咽ぶ人影があった。

小刻みに震えるインクブルーのカウルが、スノウホワイトのフードに伝い男の頬を撫でる。まるで、悲しみに暮れる大地に温かな雪が積もるような出で立ちの男は、暁の参謀ウリエンジェであった。

気が遠くなるほどの歳月イシュガルドを被覆していた竜詩戦争が終結し、束の間の安息が訪れた今、彼の心にも一時の安寧が訪れたのかもしれない。完全なる変革はこれからの世が作っていくだろうこの時、闇の戦士や暁の仲間たちの搜索、アシエンの動向調査に気を張り詰めていたことで彼の心が休まる暇など無かったのだ。

まだまだ解決しなければならない問題はあれど、アシエン消滅の為の糸口を探り、闇の戦士たちを救うため星の使徒となったミンフィリアの返還を企てた大掛かりな計画が、ようやく完遂された。

命を賭して殉職したムーンブリダを悼む気持ちはあれど、押し寄せる数々の問題に翻弄される日々だった。それがようやく、ウリエンジェの心に小さな嘆息と共に事の終わりを自覚させ、立ち止まることを許したのだった。

しかしそれは、溢れる感情を抑える為の防波堤を自ら解放したことと同義。人に涙など見せないウリエンジェが、ましてや感情の機微を見せない彼が膝を崩れさせるほどに、悲哀な姿を見せたのだった。

**「私は……失ってはいけないものを、喪ってしまったのかもしれない」**

ムーンブリダの声はもはや、ウリエンジェには届かない。ウリエンジェの声はもはや、ムーンブリダに届けられなかった。

石の家のまさにこの場所【暁の間】で、ムーンブリダは最期の使命を果たした。

その時、ウリエンジェはこの場所に居なかった。……間に合わなかった。事の顛末を伝え聞いただけで、彼女の勇姿を看取ることが出来なかったのだ。

大きな男の背中が、小さく見える。そう傍観しているのは、部屋の隅から物言わず近づく魔法人形だった。

その魔法人形は、ウリエンジェが彫金師ギルドのギルドマスターであるセレンディピティにこっそりと相談し、密かに作ったものである。

何も語らず穏やかな表情をしているのは、ウリエンジェたちが幼き頃より共に過ごした時間の中で見せていた彼女の素顔なのだろう。

「あなたは太陽の如き剛健で、月の如き温かさで、齒に衣着せぬ物言いは美しく豪然たる佇まいに私はきっと、心を奪われていた……私にはない多くのものを宿しているあなたを、羨望の眼差しで見ていた幼き日々。あなたの声音、あなたの眼差し、あなたの言葉一つ一つから気付かされたことは数知れず。物言わぬ私は終ぞ、あなたに何も伝えられなかった……」

今は亡きムーンブリダの面影を、魔法人形を依り代として傍に置いたウリエンジェは自身の心の奥底にあった想いを初めて吐露した。その穴埋めをするかのように、普段言葉の少ないウリエンジェが饒舌に言葉を吐き出すがそれも虚しく、霧散するのだった。

彼女から授かったたくさんの音義は彼の心に去来する。

ウリエンジェが届けられなかった音義は、魔法人形へと吸い込まれた気がした。

心なしか、穏やかな魔法人形の表情に、あるはずのない雫が煌めいたように見えた。

「……私は、まだ立ち止まれない。あなたの愛を、無下にはしない」

ウリエンジェは力強く立ち上がり、愛する者に振り返った。

威風堂々、その佇まいはかつてムーンブリダが示したような自信と覚悟を誇示した豪然たる姿だった。

「己が使命を果たす為、愛を貫き、新たな旅立ちへと参りましょう……」

“この旅程を、深愛なるムーンブリダへ捧ぐ……”

そう呟いて――。

\_\_\_\_Voices not received.



# あしがき

Final Fantasy XIV 新生3周年！ おめでとうございます！

そして、三周年記念小話「届けられなかった音義」を最後まで読んで下さってありがとうございます。

只今、2016年12月21日午前4時です！ 遅刻です！

あ、どうもこんばんは。Yuura.Erisellことユーラです。

今年も記念すべき8月27日に新生3周年を迎えた14ですが、今年も僭越ながら「蒼天秘話」の末席に添えさせて頂きました。

遅刻も遅刻、大遅刻で申し訳ございません。

なんとかクリスマスファンフェスまでには…！ と、意気込んでいたのですが、とりあえず年を跨ぐことはなくて一安心です。（遅刻に変わりはない）

さて、読後感に浸るひと時ではございますが、もう少々お付き合い頂ければ幸いです。イシュガルドの下層・夜のBGMなどを聞きながらお読み下さい。

まずは経緯を……と言っても、私の中で毎年恒例行事となって来ましたので、来年も10年後も14が続く限り書き続けたいと思ってます。

14初の拡張パッケージ「蒼天のイシュガルド」3.0シリーズがスタートしてからの記念祭なので「蒼天秘話」が公開された訳ですが（新生エオルゼアの際は、第七霊災回顧録）、全8話構成だったなんて…と少しビックリしました。

おそらく「紅蓮のリベレーター」はまた次の秘話に移ることを考えてだと思いますが、それならばと私の立ち位置も変わらず「蒼天秘話」の末席デザート感覚でお楽しみ頂けるものを提供したいと思って執筆しました。

前回（第4話公開後のデザート）は、ロアユとイルベルドのお話でした。今回も「二人のその後」を書こうかなという構想はあったのですが、やはり前後編という立ち位置と、3.0シリーズの締めくくりと、コンセプトの違いで役者を変えようと思に至りました。

コンセプトに関しては、私の見解ですが前後編でそれぞれ一つの漢字が当てがわれていると思っています。

前編1話～4話では「絆」、後編5話～8話では「旅」

そう考えたときに、二人の旅の終わりを描くのはエオルゼアの歴史、引いては冒険者の皆さんそれぞれで良いのかなと考え、今回はムーンブリダに語り部となってもらいました。

タイトルも「蒼天秘話」シリーズのデザートですので、寄せてあります。はてさて、「紅蓮のリベレーター」ではどんな秘話になるのか、そしてタイトルはどう寄せようかと今からワクワクしています。

それでは少し、内容について触れていきます。

「蒼天秘話」の後編はピックアップされた役者が如実にストーリーの補完をしてきていましたね。主役どころが多いのも去ることながら、最後はコンセプトである「旅」という単語を使って締めくくられていたのが印象的でした。

1話から意外性というか、前夜の位置づけで始まったのでアルフィノ、アリゼーのお話もこの路線で来る！ と一人で興奮していました。ぜひ、「蒼天秘話」本編もご覧ください。

そのデザートは、もう余韻に浸るしかないでしょう。これまでのストーリーを想起させるような回想録にしました。

毎度のことながら公式設定と矛盾があるところは、創作であることをご理解頂ければと思います。（もうすぐ世界設定本が来るので、次回以降は勉強してから書けます。笑）

ムーンブリダを語り部にしたのは、ウリエンジェの心の救済もあったのですが、まさか名杖と呼ばれるトゥプシマティになんのビックリ技も無いわけないでしょうと思って、わずかなエーテルでも吸収・保存しておけるみたいなことが出来て、それが依り代として意識を残せるみたいな設定です。

エーテル・エクストラプターの能力を素で兼ね備えている、かつ語られていないけどそのモデルでもあった。しかも強化版。これならいずれ、ルイゾワのエーテルも残ってて今後ホログラフィック映像の投影くらいはするんじゃないかななんて妄想してます。パパリモが持ってったので、なんか解析してくれるでしょう（他力本願）。

魔法人形はそのままズバリ、マメット・ムーンブリダです。説明読むとこっそり作ってたみたいな記述があります。まあウリエンジェくらいなら製造技術はあると思うんですが、やっぱり魔法人形といえば彫金師なので、セレンディピティちゃんの名前も出しておきたいっていう私のエゴです。笑

改めてタイトルのお話をさせて頂くと、お察しの通り前編デザートは「真実」と「信実」を掛けてあります。意味合いは、それぞれの言葉が持つモノそのままです。

プレイヤー視点では、あの激闘から離脱した為描写されていませんが、本当はこんなことになっていたんだよ（妄想）という真実と、泥沼化させたイルベルドの心の信実、対照的にロアユの心の信実と合わせて、それぞれの絆をバックグラウンドに置いたストーリーラインとなりました。

そして、今回の後編デザートは「音義」と「恩義」を掛けてあります。そう、同音異義語という便利な言葉の魔法です。ムーンブリダとウリエンジェは幼少の頃から一緒に居て、互いに恩義を感じながら、それが特別な感情に変わりながらも交わることがなかった。それは、最期のこの時に想起されることよって無数の音義となって胸に響くことになったのです。

そして初めて自身の奥底に眠っていた愛という気持ちに気づけたという妄想全開ストーリーとなりました。まる。

まあ、物語の性質上すべてのことをつまびらかに明かしてしまうことは、時に無粋なのかもしれませんが「蒼天のイシュガルド」のお話もいよいよ終幕ですので、せめて私のデザートくらいは食材と調理法、そしてちょっとの味付けくらいは公開しておこうと思います。

メインディッシュを生かし殺さずの立ち位置で、末席に添えて頂ければ幸いに思います。

それでは、改めましてFinal Fantasy XIV 新生3周年おめでとうございます！ そして私の「届けられなかった音義」を最後までお読みくださいませありがとうございます！

次回は、4周年記念小話「紅蓮のリベレーター」の舞台でお会いしましょう！ ではでは！

Rumuh鯖 Yuura.Erisell





## 【新生エオルゼア】

### 新生祭目次録

[言行録](#)

[見聞録](#)

[近思録](#)

## 【蒼天のイシュガルド】

2周年記念小話 [「明かされなかった信実」](#)

3周年記念小話 [「届けられなかった音義」](#)

## 【蒼天秘話】

## 【Special Thanks】

SQUARE ENIX 様

Final Fantasy XIV 様

ボーダー素材：[FREE-LINE-DESIGN](#) 様

Screen shot：[Final Fantasy XIV](#) 様

And...

You !!

[感想（連絡）フォーム](#)

この作品はFF14の二次創作であり作者の妄想から生まれた物語です。

公式設定とは異なる部分があります。ご了承ください。

スクウェア・エニックス様より申し立てがあった場合には即刻

掲載を取り下げることをお約束致します。

記載されている会社名・製品名・システム名などは、各社の商標、または登録商標です。

Copyright (C) 2010 - 2016 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.

